

は新井出成で、後手打ることであるが、従来、幾度となく、氏のさうし  
た時、既に述べた通り、このある本部食たるは、河上氏の意思の範疇に化  
したに過ぎない。さして驚きはしなかつた。だが、なんせい細迫、いさ  
井等々の解任が断つたばかりの時だったので、極めて慎重な  
態度で問題を考えてみる必要があった。で、常任委員会は、河上氏の申し  
出で、この案に同意の上で討議をかされた結果、河上氏が即時解任の  
意思をもたれるに至ったことは如何ともしがたいことであるが、その意  
思を尊重し、誠意を込めて発表することには、不慮である。ことに近々  
之中、教育委員会も発せられることであるから、その席上に於て、各々  
見守るべし、会田の同志も充分討議した上で、亮の意見をきめるのが、こ  
の場合、本部食の善後だと思ひ、ことに脱党云々の意見はすみやかに  
裁断して貰ひたい。といふやうな意見が各委員から述べられたが、結  
果、最後の決定で思ひに終つた。さらに、翌十二日の委員会に於ても、結  
果、同一の論議が繰り返されたが、河上氏に至らなかつた。ところが  
その直神道、百景両氏の解任によつて、河上氏が「次等の機関紙は常  
任委員会の方針によつて編輯する」とも声明したので、各常任委員は  
会々安心し、大山委員長はけじめとして、赤川、石原、山花の常任委員  
たちは、予定通り、十八日に関西遊説に出発したのである。

としての戦半的解体といふ見出しのもの——が雲々と掲載されて来たの  
である。上村氏や神道氏が、どういふ道行をとつて、河上氏等と行動を  
共にするやうになつたのかは、木だにハッキリしないが、とにかく、河  
上が、それらの人々を引き込むために、常任委員会には全然秘密に、何  
事か陰謀的策動をしたことだけは疑のなき事実である。殊に最も厄あつた  
と考へられることは、河上氏が、党本部書記局を欺瞞して機関紙をひ  
そかに各地に発送した態度である。平生、機関紙は、本部書記局の牛を  
通じて全国に発送されて来たのであるが、河上氏等は、同書の機関紙に  
限り、それを直接、印刷所から自宅にはこひ、同所に於てひそかに発  
送を行つたのである。しかも、同党、おそくまで、機関紙の出来上るの  
を待つてゐた書記局へは、機関紙の印刷が進んだから、発送は明朝に延  
期する、と言つて電話で通知し、完全に書記局を欺瞞して去つたのである。  
この河上氏等の極めて早急な裏切り行動に對して、留守をおつかつて  
ゐた書記局では、直に、全国各支部へ詳細なる報告書を送ると同時に  
大山委員長等に電報をもつて解任を促した。大山委員長等は、二十三  
日に解任したが、日夜、党本部で、緊急常任委員会を用き、早速、河上  
氏等の憲法問題と誠懇に止めた。

同党は、会談を公開し、東京府支部聯合会所長の党員諸君および地方  
から上京して来た二三の党員諸君の傍聴を許し、飽くまで、大衆の面前  
に於て審議する方針を採つた。河上、上村、神道氏等に対し、くも勿論云